

中学校 C 男女共修におけるメリット・デメリットについて

～実践例を踏まえて～

川上 滋也 (君津)

近藤 冬馬 (長生)

加藤 亨典 (木更津袖ヶ浦)

大野 雅友 (夷隅)

泰原 凌 (市原)

川上 貴裕 (安房)

1 はじめに

学習指導要領改訂によって、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展、AI や Society5.0 に代表される急速な技術革新、SDGs の実現、社会構造や雇用環境の急激な変化といった様々な背景のもとで、“多様性”を一つの原動力としながら、学校教育は新たな価値を生み出していくことが期待されている。保健体育科における男女共修の取組は、まさにこのような教育界の潮流にあって、互いの違いを認めるとともに、他者と協働して課題を解決していくことを通しながら、体力や技能の程度、性別や障害の有無等にかかわらず、「新たな運動やスポーツにおける共生」への価値につなげていくことに大きく寄与していくものと考えられている。また、生涯スポーツの視点から見ても、余暇を利用して男女が一緒にスポーツを楽しみ、活動できる基盤を養うことができ、学校体育で実践することは生涯スポーツに向け、重要な学習経験になる。そして、男女が一緒にスポーツを学ぶことで、生徒個人の能力や、可能性を伸ばすだけでなく、他者とのより良い関係を構築し、生活していく力が育成できる。個性や能力の違う人同士が、共に活動できるようになる可能性をもっているため、誰とでもスポーツができる心を養うことができる。このことは生涯スポーツに向けた大きな資質だと考えた。そこで、本グループでは、「男女共修におけるメリット・デメリットについて」『球技』、『武道』、『陸上競技』の実践例を紹介する。

2 実践例

(1) 球技：ザースボール

① 対象生徒 第3学年 男子31名、女子30名

② 生徒の実態

男女が互いに尊重し合い、助け合って活動できる集団である。しかし、運動能力で考えると男女ともに二極化しており、通常の単元を行うと能力差により集団によるチームプレイが生まれにくい。生徒全員がプレイに参加し、お互いの良さが補い合えるスポーツの選定が必要である。そのため、現代のコロナ渦に適した非接触型の球技「ザースボール」というニュースポーツを展開した。

競技の特性

- *エリアを区別することでパス・シュートを数的優位に行うことができる。
- *非接触型のため、男女差を感じにくい。誰でもできる。

ねらい

- *男女共修による体格差や能力差を最小限に抑える。
- *話し合い活動の活発化に取り組む。(戦術)

男女共修によるメリット

- *ルール変更による戦術理解の向上ができる。
- *それぞれの特徴を生かし、良さを尊重し合える。
- *シュート回数の増加

展開の紹介・説明	展開の様子
<p>*運動が苦手な生徒でも、作戦を共に考える姿が多く見られる。また、女子の困り感を男子が聞くことで、お互いの悩みを共有しやすい環境を作ることができる。</p>	
<p>*シュートエリアでディフェンスができる人数は、3名。もしも、赤枠以外のディフェンダーがシュートエリアに侵入した場合、反則による30秒間の退場。また、その間に得点が認められた場合は、得点が倍となる。オフェンス側は、制限がなく、何名でも侵入してよい。</p>	
<p>*シュートエリアに3秒以上留まることはできない。そのため、パスキャッチと同時にゴールエリアに侵入する。片足のみの侵入では得点は認められないため、両足が入っていなければならない。得点は、審判が判定を行う。女子がキャッチして得点の場合、得点を3点などにルール変更することで、作戦など違った面白みも出てくる。</p>	

(2) 武道：剣道

- ① 対象生徒 第2学年男子37名、女子42名
- ② 生徒の実態

剣道は、わが国固有の文化であり、礼節を重んじた所作がある。更には打つ、打たれる経験を通して、打たれる痛みを知り、相手のことを考え、尊重し合うことができる。この剣道の授業を通して、相手の気持ちを考えること、相手への礼を重んじること、お互いを尊重し、男女関係なく良いものは良いと評価することの大切さを学び、学校全体のことを考えられる学校のリーダーとなってほしいと考え、剣道を実施した。

競技の特性

- *礼儀や態度の育成が図ることができる。
- *所作の一つ一つに意味があり、練習を通して伝統的な文化に触れることができる。

ねらい

- *打つ・打たれる経験を通してお互いを尊重することができる。
- *竹刀を用いる剣道は、男女差が生じにくい。

男女共修によるメリット

- *良い打ちに対して、男女関係なく認め合うことができる。
- *男女それぞれの良さを認め合うことができる。

展開の紹介・説明	展開の様子
<p>*一斉指導では、全体の間隔を確保すれば、密になることもなく、また、発声を十分にすることができる。 男女ともに練習を行うことで、お互いの素振りの良さを見合うことができる。</p>	
<p>*基本的な体さばき練習などは、男女関係なく練習ができる。どんな相手にでも礼儀を大切にし、竹刀を向け合ったならば、真剣に相手の目を見て真剣勝負に挑むという意識は、同性間よりもむしろ異性間の方が高まる。 *初めは照れもあるが、剣道の本質を見出すようになると、男女関係なく構えることができた。</p>	
<p>*お互いに打つ、打たれる経験をする中で、相手を思いやる心を育成することができた。女子は改めて男子の力強さに驚いていた。更には力を抑えて打つ男子がいると、その生徒の優しさを感じたりしていた。反対に男子は、女子でも鋭い踏み込みによる打ちや、気合の入った発声に驚き、尊敬の念を抱いたことが学習カードから読み取れた。 *剣道部の生徒がいると、【気剣体が一致】した打突を学び、男女関係なく良い打ちを認め合える関係を構築できた。</p>	

(3) 陸上競技：短距離走・リレー

- ① 対象生徒 第1学年男子18名、女子15名
- ② 生徒の実態

新体力テストの結果より、運動能力は全体的に高いとは言えない。だが、課題に対してグループで解決方法を模索し、解決しようと取り組むことができる学級である。運動が得意な生徒、得意ではない生徒の二極化がはっきりしているが、男女関係なく話し合い、アドバイスし合える場面がたくさん伺えることから男女の長所、短所を生かした活動ができると考える。

競技の特性

- *記録に挑戦しやすく、相手との競争もすることができる。
- *短時間に集中して全力で取り組み、敏捷性や瞬発力を高めることができる。

ねらい

- *課題解決に向けて意見を伝え合う。
- *体格差を考えた戦術の考案。

男女共修によるメリット

- *「勝利」や「競争」といった意識を変化させる。
- *個性や能力の違う生徒同士が共に活動できる。

展開の紹介・説明	展開の様子
<p>*各グループでバトンパスの練習を行う。実践していない生徒は行っている生徒を見てアドバイスをまとめておく。</p> <p>*受け手はバトンを受ける際、腕が上がっていると思っているが、実際には腕が上がっていないことが分かる。</p>	
<p>*グループ活動が終了したら、グループごとに話し合い活動を行う。</p> <p>*話し合い内容は「受け手」、「渡し手」の改善すべき所や良かった点、走順の変更提案など。話し合いが終了した班からアドバイスを参考に練習していく。</p>	
<p>*話し合い活動のアドバイスを受け、再度、グループ活動を行う。ここではこの後の記録測定のため確認程度の活動であった。</p> <p>*記録測定では他グループとの競争ではなく、自チームの技能向上・記録更新を目標に展開した。</p>	

3 成果と課題

球技【ザースボール（ゴール型）】、武道【剣道】、陸上競技【短距離走・リレー】の3つの実践を通じた成果と課題は様々あるが、どの領域においても成果が多く見られた。成果としては、お互いの良さを尊重し、認め合うことで、男女間の仲が深まり、その後の学級経営に大きな影響を与えた。ルールや内容を工夫することによって、運動能力の男女差を感じにくくすることができた。同性の集団だけでは作ることのできない雰囲気作りができ、やる気のある生徒に影響される等が挙げられる。課題としては、運動量の多い男子がいろいろな面をカバーしてしまうと、女子があまり動かなくなってしまう。一定の役割は与えられるものの、新たな技能の習得という点では改善が必要だろう。

4 まとめ

今回の実践は球技【ゴール型】、武道【剣道】、陸上競技【短距離走・リレー】だったが、どの領域においても男女共修によるメリットやデメリットがあった。技能面で見ると、走る、投げる、打つといった動作は男子のほうが目立つ場面もあるが、内容等の工夫で男女間の運動能力の差を感じにくくすることができるということがわかった。また、技能面以外の視点から見ると、思いやりの心や相手の立場になって考えること、自分にはできない動きを観察することによる意欲の向上等はメリットとして挙げられた。実践は3つの領域でしか行っていないが、どの領域においても、教師側の更なる工夫や場の設定など改善が必要である。今後も男女共修における実践活動を継続し、より良い体育運営を心がけていくべきである。